Ⅱ−10　湯舟坂２号墳の土器と被葬者像

稲本 悠一

１．はじめに

黄金の双龍環頭大刀の出土で有名な湯舟坂２号墳からは、その他にも武器、馬具、装身具、銅製品、土器など、多種多様な副葬品が出土した。被葬者の権威を物語るこれらの豊富な副葬品の中で、最も出土点数が多いのは、総数約 210 点を数える土器である。点数に加え、盗掘を受けず、複数回の埋葬に伴う古墳時代の状況がほぼそのまま残っていた点も重要である。

横穴式石室出土土器に関する先行研究では、土器から古墳の年代、被葬者像、葬送儀礼、他地域との交流など、様々な内容が検討されてきた。湯舟坂２号墳は上述の内容を含め、古墳時代の様相をうかがう絶好の資料といえる。そこで本論では、近年の再検討とそこから得られた新知見を述べ、湯舟坂２号墳の被葬者像や埋葬人数、葬送儀礼について論じる。

２．先行研究と本論の検討内容

（１）横穴式石室出土土器をめぐる先行研究

先行研究については、近年の藤野一之氏や森本徹氏の論考（藤野 2019、森本 2020）に詳しい。詳細はこれらを参照されたいが、ここでは概要を摘記しておく。

葬送儀礼　　まず、横穴式石室出土土器については、土器を用いた葬送儀礼に関する研究がある。小林行雄氏や白石太一郎氏、土生田純之氏らの研究は、解釈に差異は認められるものの、大きくみれば、石室内の土器と「死後の食べ物」、すなわち「黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）」との関連を想定し、被葬者（死者）に対して土器あるいはその内容物である食物を捧げる儀礼行為を想定する（小林 1976、白石 1975、土生田 1998）。その他の論考においても、「土器供献」、「食物供献」という表現がなされる場合は、同様の儀礼が想定されている場合が多いとされる（森本 2020）。これとは対照的に、横穴式石室出土の土器は、生者が被葬者（死者）との別離の宴（近藤 2001）や「飲食儀礼」に用いたものとみる見解（森本 2007）もある。また、近年は横穴式石室出土土器をその組成から、葬送儀礼に伴う「饗宴」時に残された「饗宴土器群」と死後の生活のために置かれた「死後世界土器群」という二相で解釈した研究も提示されている（寺前 2006・2022）。これらの議論については、考古学研究が不得意とする観念的な内容とあって未だ定説があるわけではないが、横穴式石室出土土器にかかる重要な研究視点といえよう。

器種構成　　石室出土土器の器種構成に注目した研究も各地で盛んであり、副葬土器や被葬者などの階層性を読み取る試みがなされている。例えば、白澤崇氏は東海地域の事例から「注ぐ」機能をもつ瓻を頂点とする須恵器副葬の階層性を指摘し（白澤 1998a・b）、寺前直人氏は脚付器種（器台・脚台付壺・高杯）の有無が被葬者の階層性と葬送儀礼の格付けに基づくとする（寺前 2005）。藤野氏も指摘するように、器種構成には階層性や地域性など複数の要因が反

映されたとみられ（藤野 2019）、各地における研究の深化が期待される。

（2）湯舟坂２号墳出土土器に関する先行研究

次に本論で検討する湯舟坂２号墳出土土器についてもみておこう。

まず、1983 年に刊行された報告書では、発掘調査担当者の奥村清一郎氏が出土土器を報告し、新納泉氏が須恵器の編年を提示した。奥村氏は、出土須恵器をそれぞれの特徴（胎土・焼成・色調など）から 14 つにグルーピングし、主に 1 ～ 6 類が奥壁部出土、7 ～ 14 類が袖部・羨道部出土という傾向を指摘した。また、新納氏は奥壁付近と袖部・羨道部から出土した土器群に大きく二分し、奥村氏のグルーピングも踏まえてそれぞれを型式学的方法に基づき細分した上で、須恵器からみた湯舟坂２号墳の築造年代は６世紀中葉か後葉となり、７世紀前葉か中葉まで追葬が続いたとまとめた（奥村編 1983）。ただし、奥村氏は 1 ～ 14 類について「器形ごとさらには追葬のたびごとに異なった生産地から須恵器が供給された可能性も考えられるが、いっぽう同一の生産地における器形・年代その他による差異とみられるものが含まれている可能性も高」く、「一部畿内地方からの搬入品を含んでいる可能性」もあり、須恵器の生産と供給の実態は、不明瞭であると指摘している（奥村編 1983：117・118 頁）。

近年は、京都府立大学 ACTR 湯舟坂２号墳プロジェクトに伴う再検討が進んでおり、土器群と埋葬段階の再検討（菱田 2021、稲本 2023）に加え、須恵器食器の重量に注目した生産実態と変化の検討（溝口 2023）、土師器に関する新知見（菱田 2023）などが提示されている。

（3）現状の課題と本論の検討内容

以上、横穴式石室出土土器と湯舟坂２号墳出土土器に関する先行研究を概観した。

本節では、現状の課題と本論の検討内容を示しておく。まず、報告書では石室内の土器は大きく二分されたが、被葬者像や埋葬人数に迫るには、可能な限り土器群を細分し、各埋葬段階の具体相に迫る必要がある。そこで本論では、石室内の土器の出土位置と各土器の様相を踏まえて、埋葬段階を再検討する。前者については、報告書における石室の区割りを用いる。後者については、報告書で示された奥村氏のグルーピング（奥村編 1983）が遺物の特徴を極めて的確に捉えた分類であったため、参考とした。

ただし、横穴式石室では、追葬時の遺体や副葬品などのスペース確保のため、以前に入れられた副葬品などが移動されることがある。「片付け」とも称されるこの行為は、埋葬の度に単発的に行われるのではなく、一定の時を待って一斉に実施された行為であり、また全ての古墳で必ずしも遂行された訳ではないが（森岡 1983）、遺物が原位置を留めていない可能性を考慮した上で、各埋葬段階の様相を慎重に検討する姿勢が求められる。石室の土器研究における難題の一つであり、湯舟坂２号墳もこの例に漏れない。

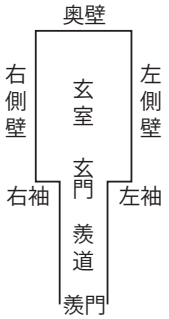


図１　石室の各部名称
※左右は奥壁側から玄門を見た時の向きを示す

以上の点を考慮しつつ、湯舟坂２号墳出土土器の再検討を実施した。以下では、まず土器からみた埋葬段階と想定される被葬者数について論じ（３節）、その後、特定の遺物から想定される被葬者像や葬送儀礼について考察を行う（４節）。なお、本論における横穴式石室の部位名称は図１に示す通りである。

３．土器からみた埋葬段階と被葬者数

出土位置とグルーピングに注目し、石室内の土器を再検討すると、それぞれに一定の対応関係がみられ、奥壁部、左袖部、羨道部、の３グループに大別できると考えられた[(1)]。各グループは副葬されたタイミング、すなわち埋葬の段階と対応するとみられる（表１、図２）。以下、各段階の様相をみていこう。

（１）奥壁部

多くの土器に加え、環頭大刀、鉄鏃、馬具、銅鋺などが密集して出土した。石室内の区割りでは１～４区に該当する。確実に奥壁部に伴う土器は図２に示した 108 点で、湯舟坂２号墳出土土器の半数以上を占める。

須恵器は１・３～７類が主で（表１）、杯や椀に加えて、多量の高杯や上位の古墳でみられる脚付長頸壺、脚付子持壺などの脚付器種、甕もみられる。また、多量の杯類には形や調整に差異がみられ、時期差（３類→４・５類）があると考えられる。新納氏も指摘したように、奥壁部の遺物は一度ではなく、初葬とその後の埋葬に伴う副葬品が「片付け」されたものと想定できる（奥村編 1983）。土器が多数重なっていた出土状況も傍証となろう。以上より、土器からは、最低２回の埋葬、２人以上の被葬者を推定する。ただし、奥壁部からは３セットと対にならない１点、計７点の耳環が出土しており、実際はより多い人数が埋葬されたのだろう。

なお、奥壁部の土器の年代については、溝口泰久氏の研究（溝口 2023）を参照されたいが、報告書刊行当時の研究成果から大幅な変更はないようで、TK43 型式期、おおよそ６世紀後葉に求められる。

（２）左袖部

追葬に伴うもので、須恵器、武器、馬具などの出土と、釘付式木棺が置かれた点が注目される。石室内の区割りでは 10・12 区に該当する。確実に左袖部での追葬に伴うと判断したものは図２に示した 25 点である。

須恵器は８・11 類が主で（表１）、その構成も杯・椀・平瓶と奥壁部に比べてシンプルである。脚付器種は含まれない。また、次節で詳述するが、８類の須恵器には赤色顔料が付されたものが新たに確認できた。

なお、左袖部の遺物は型式的にもまとまっており、単一の埋葬に伴うものとみ

表１　石室内の土器出土傾向

出土位置			須恵器のグルーピング															合計
			１類	２類	３類	４類	５類	６類	７類	８類	９類	10類	11類	12類	13類	14類	その他	
玄室	奥壁	１区	6		7	4.5	2		**12.5**		1	1	1				8.5	43.5
		２区	**26.5**		11.5	3.5	4	3	2.5		1	5					6.5	63.5
		３区																0
		４区	0.5		**1.5**													2
	中央	５区																0
		６区																0
		７区		**2**														2
		８区																0
	左袖	10区				1				1			**7**					9
		12区								**8**	1	0.33	0.5	2			3	14.83
	右袖	９区								**2**				**2**				4
		11区		0.5					1		1	0.33		**8**		1	2.5	14.33
	羨道	14区							0.5			1.83	**2.5**				1	5.83
		16区	1									2.5	**13**	2		1	4.5	24
		13区	1	0.5					0.5					**2**			3	7
		15区	2	2							1	2		**3**	1		1	12
		17区																0
		18区																0
		19区																0
		20区																0
		21区									**2**						1	3
		22区																0
	前庭部													1			1	2
	不明																1	1
合計			37	5	20	9	6	3	17	11	7	13	24	20	1	2	33	208

出土位置の区割りは報告書を踏襲。複数区にまたがるものは、一個体を出土地区数で割って計上
濃いトーン：各グルーピングにおいて須恵器の出土数が最も多い区
ゴシック体：各区の中で出土点数最多のグルーピング

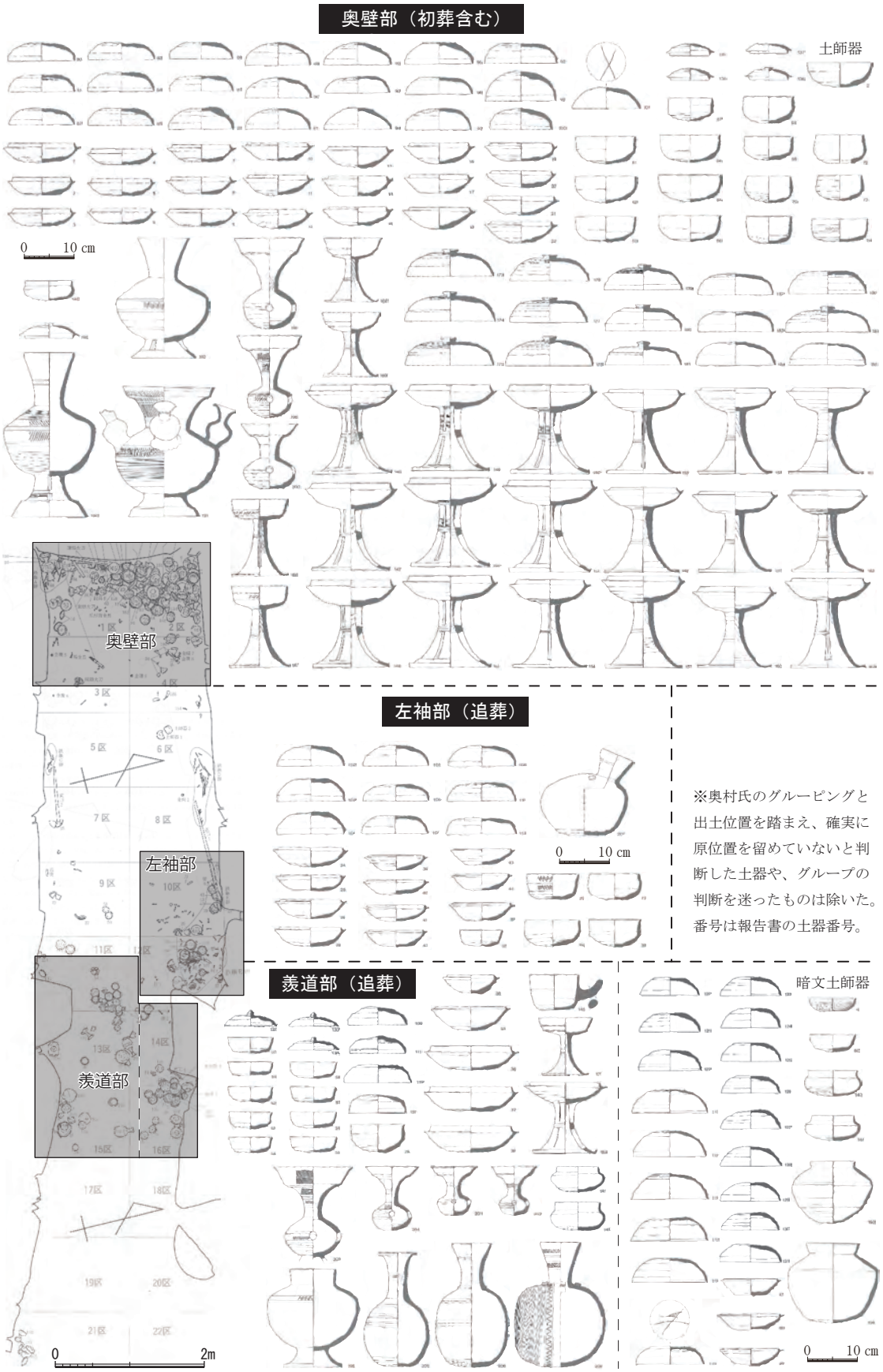


図２　出土位置とグルーピングから推定した土器副葬の段階（S=1/12）（奥村編 1983 をもとに作成）

られる。土器は TK209 型式期（田辺 1981）に相当するとみられ、実年代としてはおよそ７世紀初頭を想定しておく。

（３）羨道部

追葬に伴うもので、左袖部より新しいとみられる。石室内の区割りでは、13 ～ 16 区に該当し、一部玄室内の 11・12 区の遺物を含む。羨道部に伴うと判断した土器は図２に示した 62 点で、湯舟坂２号墳出土土器の約３割を占める。

須恵器は、羨道部右側（11・13・15 区と 12・14・16 区の一部）に２・12 類、同左側（12・14・16 区）に 10・11 類が集中し（表１）、左右が異なるグループであった可能性もある。図２には波線でその境を示したが、土器が散乱していた状況から確定は難しく、ここでは一括して検討する。被葬者は軍事的な性格が薄れ、仏教との関わりがあったのか、武器の副葬がほぼ皆無となり、仏器（水瓶）を模した須恵器（報告番号 205・206）の副葬が注目される。

埋葬の回数は、先述の細分できる可能性も踏まえ、最低１回と考えておく。なお、溝口氏は羨道部出土の須恵器が飛鳥地域の７世紀半ば頃の資料と類似すると指摘する（溝口 2023）。次節にて詳述するが、出土した暗文土師器も飛鳥地域の資料を参照すれば、同時期に位置づけられる。したがって、この年代観は妥当で、追葬は７世紀中頃まで続いたと考えられる。

（４）小結

以上のように、湯舟坂２号墳の土器は３段階に大別できる。また、①いずれの土器群にも貯具である甕や調理具は含まれず、食器が多数を占めること、②奥壁部では多量にみられた高杯などの脚付器種が袖部・羨道部ではほぼみられないこと、③奥壁部の土器群は「片付け」された一方、袖部・羨道部は「片付け」された可能性が低いこと、も指摘できる。

特に③については、森岡氏の見解（森岡 1983）を援用すれば、奥壁部付近に埋葬された被葬者達と、袖部・羨道部に埋葬された被葬者達とでは家族系譜の世代が異なるという理解もできよう。推測の域を出ないものの、②・③のような奥壁部と袖部・羨道部の様相の差異からは、葬送儀礼や被葬者集団に大きな変化があったと想定できるかもしれない。

では、個別の土器の検討を通して、被葬者像や葬送儀礼の具体へさらに接近することはできるだろうか。次節ではこのような視点のもと、各埋葬段階の土器群の中でも、被葬者像や葬送儀礼を復元しうる資料について検討していこう。

４．被葬者像・葬送儀礼の考察

（１）奥壁部出土須恵器と被葬者像

まず、奥壁部の土器で一際目を引くのが、脚付長頸壺（報告番号 190・192）と脚付子持壺（報告番号 191）であろう。当該期土器の上位器種と評価され、その有無は土器から古墳のランクを推定する際の指標となってきた。丹後の横穴式石室、横穴墓の階層性を検討した中村彰伸氏の研究によれば、これらの土器が出土した古墳は少なく（中村 2018）、隣接する但馬（円山川流域）においても、脚付壺は「在地における階層的上位者もしくは畿内地域と強く紐帯していた被葬者の存在が考えられる古墳」で使用されたようである（三原 2021：68 頁）。

ここで注意すべきは、脚付長頸壺や脚付子持壺がいずれも葬送儀礼専用の器物とみられ（田辺 1981 ほか）、他地域でも、高杯や脚付長頸壺を含む器種構成が当時中心地であった畿内と類

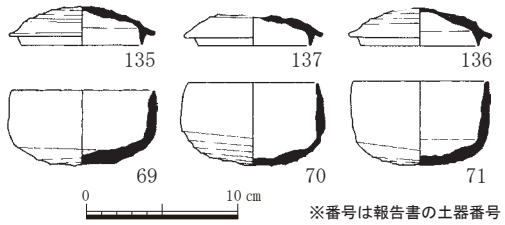


図３　７類の椀と蓋（S=1/5）（奥村編 1983）

似し、ある程度共通した内容の葬送儀礼が実施されたとみられている点である（藤野 2019）。このような状況に鑑みれば、当然、湯舟坂２号墳にも器物というハードだけでなく、葬送儀礼、すなわちソフトも合わせて持ち込まれた可能性は高いと考えられる。丹後における土器副葬や葬送儀礼の受容過程を明らかにした上で評価する必要があるため、本論では予察に留めるが、湯舟坂２号墳の初期の被葬者とその周辺が畿内との交流のもと、葬送儀礼にかかる情報を得ていたことは想像に難くない。

加えて、注目したいのは、７類の椀とその蓋である（図３）。蓋はつまみがなく、かえりをもつもので、一見すると杯身にしかみえないが、調整が丁寧な点で杯身とは異なる。この特徴的な蓋と椀のセットは、丹後、但馬、鳥取県、北部九州などの日本海沿岸地域に加え（松永 2014）、播磨や淡路でも出土が確認されている 。菱田哲郎氏も指摘するように、椀は古墳時代から飛鳥時代的な器への変革期の中で出現する器形であり、新出の器がいち早く湯舟坂２号墳に副葬された点は重要であろう（菱田 2023）[2]。

先述の通り、奥壁部の土器群は、古墳築造の契機となった初葬者を含む、複数回の埋葬に伴う土器の集合体と評価でき、個別に被葬者の具体を明確化するには至らない。しかしながら、土器の検討から、湯舟坂２号墳に葬られた初期の被葬者とその周辺が畿内など、他地域との交流を有し、葬送儀礼や最新の器にかかる情報を得ていたとみることは許されよう。

（２）左袖部出土土器と被葬者像・葬送儀礼

赤色顔料記号付須恵器　　次に左袖部の土器について、今回の再検討では赤色顔料で記号が付された須恵器を新たに確認した。赤色顔料はベンガラとみられ、８類の杯蓋４点と杯身１点に確認できた。杯蓋は天井部境の稜より下、杯身は底部付近の稜より上と、いずれも近しい位置に付される。赤色顔料の範囲は不鮮明だが、おおよそ 1.5 ～ 2.5㎝で、形は点状や楕円状を呈する（写真１、図４）。須恵器のグルーピングと赤色顔料記号の内容の共通性が高いことから、記号は同じタイミング、場所で付されたとみて問題ないだろう。

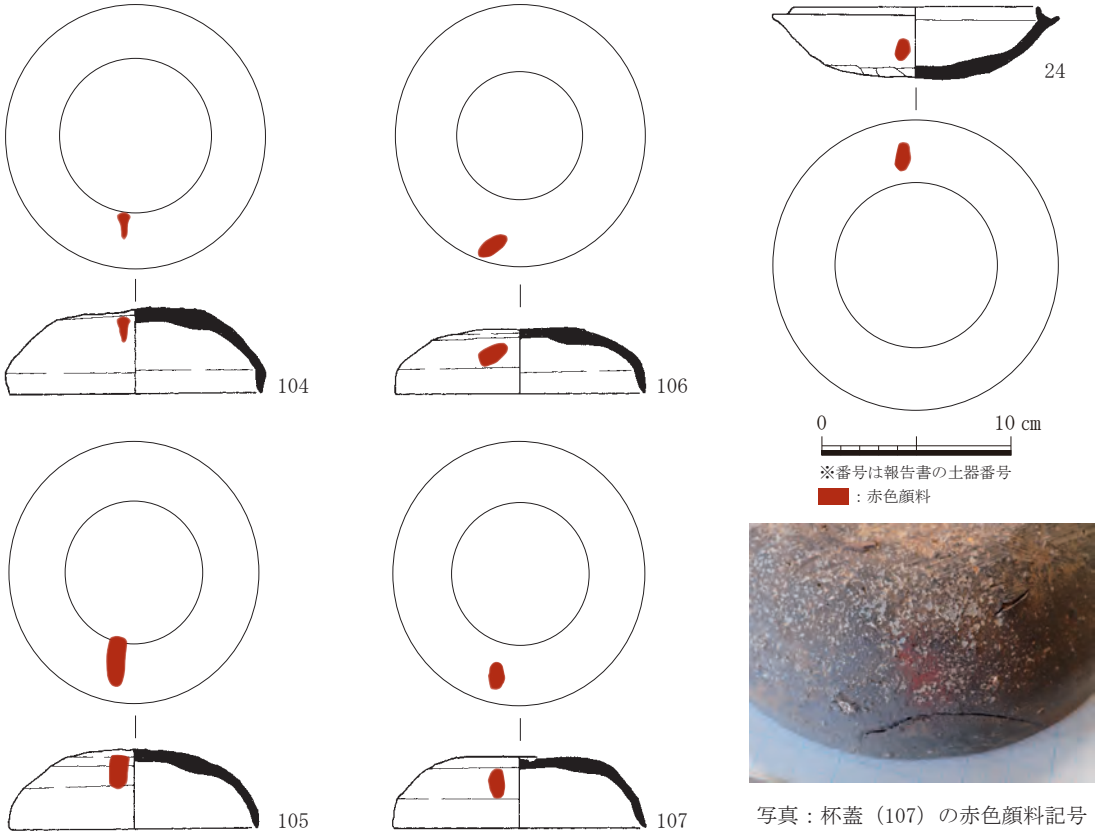
赤色顔料あるいは漆を用いて記号を付した、いわゆる彩色記号付須恵器[3]は各地で散見され、湯舟坂２号墳の資料単独ではなく、他地域の事例も踏まえ、評価する必要がある。そこで、これらを体系的にまとめた三木雅子氏の研究（三木 2005）を参考に、検討を進めていきたい。

写真１　赤色顔料記号付須恵器（栗山雅夫撮影）

赤色顔料記号付須恵器の分布と意義　　図５と表１は三木氏の研究成果に、新たに確認できた事例を加えたものである。三木氏によれば、彩色記号の展開過程はⅠ～Ⅲ段階に整理されており、本論に関連するⅠ・Ⅱ段階は、大まかに以下のように概括できる（三木 2005）。

Ⅰ段階（６世紀前葉～後葉）

：「朱書き記号」のみ確認できる



写真：杯蓋（107）の赤色顔料記号

図４　湯舟坂２号墳の赤色顔料記号付須恵器（S=1/4）（奥村編 1983 の実測図に加筆、写真は筆者撮影）

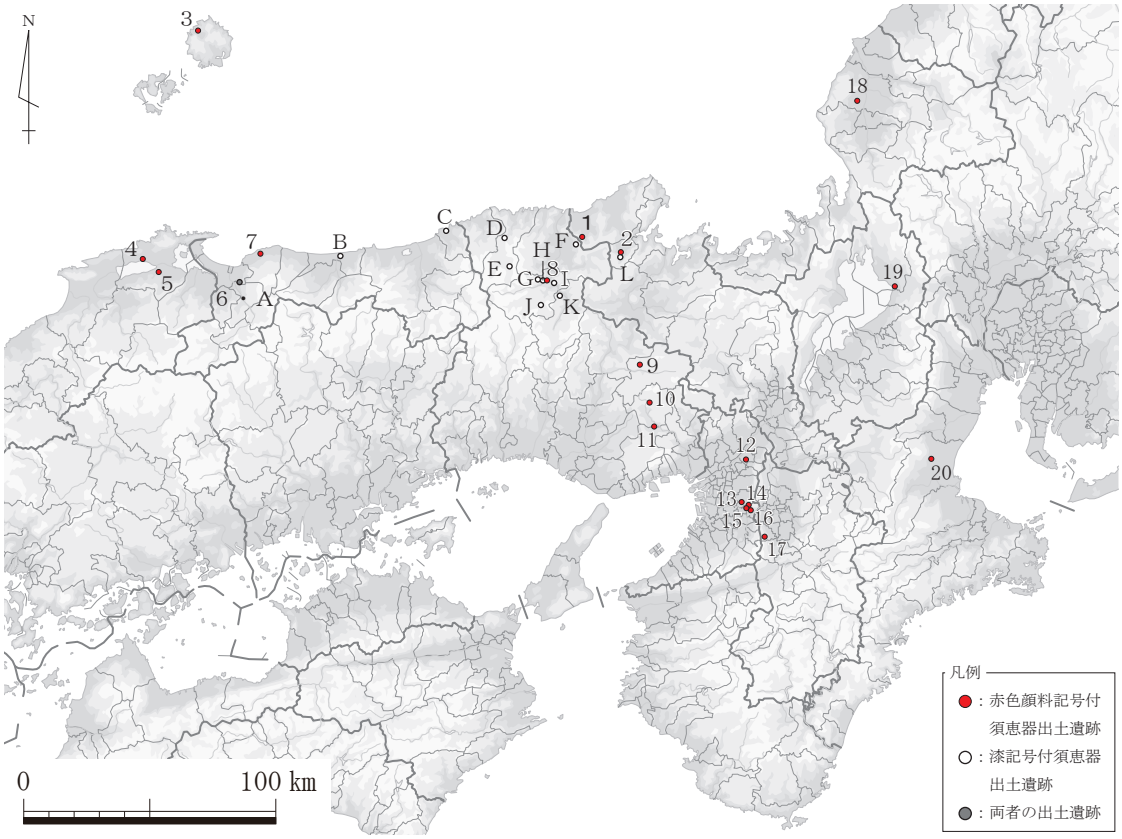


図５　彩色記号をもつ須恵器の分布

表２　彩色記号付須恵器の出土遺跡

赤色顔料記号付須恵器

	遺跡名	所在地	遺跡	遺構	年代	内容・点数	記号	備考	文献
1	**湯舟坂２号墳**	京都府京丹後市	古墳	円（17.5）　横	７Ｃ初（Ⅱ）	杯蓋４、杯身１	「・」	追葬時	1
2	入谷西Ａ−１号墳	京都府加悦町	古墳	竪横	６Ｃ後半（Ⅰ）	杯蓋１、杯身１		朱入りの須恵器壺出土	2
3	東笠根１号墳	島根県隠岐の島町	古墳	円　横	６Ｃ後半（Ⅰ）	杯蓋３、杯身１	「×」		3
4	筆ノ尾横穴群 第４号穴	島根県松江市	古墳	―　横穴	６Ｃ後半（Ⅰ）	杯蓋１、杯身２		遺骸のベンガラ付着か	4
5	袋尻３号横穴	島根県松江市	古墳	―　横穴	６Ｃ後半（Ⅰ）	杯蓋１	「×」		5
6	石州府４号墳	鳥取県米子市	古墳	円（19.0）　箱	６Ｃ末（Ⅱ）	杯蓋１、杯身４	「∧」	追加墳丘築造時に埋没	6
	石州府100号墳	鳥取県米子市	古墳	円（10.0）　横	６Ｃ末（Ⅱ）	杯蓋１	「−」		
7	名和飛田遺跡	鳥取県大山町	集落	竪穴建物２・３	６Ｃ末（Ⅱ）	杯蓋２、杯身２		建物廃絶時祭祀に伴う	7
8	小山４号墳	兵庫県養父市	古墳	円（14.0）　―	６Ｃ前半（Ⅰ）	杯蓋１	「−」		8
9	箱塚４号墳	兵庫県丹波篠山市	古墳	円（19.0）　横	６Ｃ中頃（Ⅰ）	杯蓋２、杯身１	「Ｔ」「×」		9
10	前ノ谷古墳	兵庫県三田市	古墳	―　横	６Ｃ末～７Ｃ初（Ⅱ）	杯蓋１	「×」		10
11	墓山古墳	兵庫県三田市	古墳	方　木	６Ｃ前半（Ⅰ）	杯蓋３、杯身４	「×」		11
12	讃良郡条里遺跡	大阪府寝屋川市	集落	自然河川	５Ｃ中	杯蓋１	「×」		12
13	志紀遺跡	大阪府八尾市	集落	水田畦畔上	６Ｃ末（Ⅱ）	杯蓋３、杯身１			13
14	大県遺跡	大阪府柏原市	集落	溝・遺物包含層	５Ｃ後葉～７Ｃ 初（Ⅰ・Ⅱ）	杯蓋14、杯身11	「・」「×」 「―」		14 15
	大県南遺跡	大阪府柏原市	集落	溝６	６Ｃ末～７Ｃ初（Ⅱ）	杯身２	「×」など		14
	平野・大県古墳群 第15支群10号墳	大阪府柏原市	古墳	円（10.0）　横	６Ｃ前半（Ⅰ）	杯蓋１			16
	同第15支群11号墳	大阪府柏原市	古墳	―　横	―	甕１		周溝から出土	16
	同第27支群２号墳	大阪府柏原市	古墳	円（15.0）　横	６Ｃ中～後半（Ⅰ）	杯蓋１			16
	太平寺遺跡	大阪府柏原市	集落	―	７Ｃ中葉（Ⅲ？）	杯身２			17
15	船橋遺跡	大阪府柏原市	集落	採集	６Ｃ後半（Ⅰ）	杯身１			18
16	高井田遺跡	大阪府柏原市	集落	谷	７Ｃ前葉（Ⅱ）	杯身１	「―」		19
	高井田横穴 第４支群44号墳	大阪府柏原市	古墳	―　横穴	６Ｃ後半（Ⅰ）	杯蓋１、杯身１	「Ｔ」		20
17	寺口忍海古墳群 Ｈ支群29号墳	奈良県葛城市	古墳	円（16.0）　横	６Ｃ末～ ７Ｃ初（Ⅱ）	杯蓋２、杯身２	「×」など		21
18	小羽山８号墳	福井県福井市	古墳	円（11.0）　木	５Ｃ後葉	杯身１	「×」	墳丘斜面出土	22
19	大戌亥遺跡	滋賀県長浜市	集落	溝001・010	６Ｃ末～７Ｃ前葉(Ⅱ)	杯蓋１、杯身２	「×」「―」		22
20	小屋城古墳群 １号墳	三重県津市	古墳	円（17.0）　横	６Ｃ末～ ７Ｃ初（Ⅱ）	杯蓋４、杯身２	「×」など		23

漆記号付須恵器

	遺跡名	所在地	遺跡	遺構	年代	内容・点数	記号		文献
A	石州府古墳群	鳥取県米子市	古墳	円・後円　横・箱	６Ｃ末～７Ｃ 中葉（Ⅱ・Ⅲ）	杯蓋16、杯身23		合計14基の合計	6
	石州府第４遺跡	鳥取県米子市	集落	―	７Ｃ後葉（Ⅲ）	杯蓋１、杯身２			6
B	長瀬高浜遺跡 １号墳	鳥取県湯梨浜町	古墳	円（24.0）　箱式	６Ｃ末（Ⅱ）	杯蓋１、杯身１	「×」	周溝から出土	24
C	浦富５号墳	鳥取県岩美町	古墳	不明　横	７Ｃ末～ ８Ｃ前葉（Ⅲ）	杯蓋１、杯身１	「×」		25
D	知見１号墳	兵庫県香美町	古墳	円か　横	７Ｃ中？（Ⅲ？）	高台杯２	「×」		26
E	文堂古墳	兵庫県香美町	古墳	円　横	７Ｃ前半（Ⅱ）	杯蓋６、杯身28	「×」など		27
F	市場神無遺跡群 Ⅳ区１号墳	兵庫県豊岡市	古墳	円（6.5）　横	７Ｃ後半（Ⅲ）	杯身５			28
G	西家の上２号墳	兵庫県養父市	古墳	円（12.0）　横	７Ｃ前半（Ⅱ）	杯蓋１、杯身１			29
H	東家の上３号墳	兵庫県養父市	古墳	円（7.7）　横	７Ｃ前半（Ⅱ）	杯身３	「×」など		8
I	穴ヶ谷西11号墳	兵庫県養父市	古墳	円（12.0）　横	７Ｃ前半（Ⅱ）	杯身２			30
J	寺山古墳群？	兵庫県養父市	古墳	採集	７Ｃ前半（Ⅱ）	杯身	「×」		26
K	宮内中山６号墳	兵庫県朝来市	古墳	―　横	７Ｃ前半（Ⅱ）	杯蓋２			31
L	滝岡田古墳	京都府与謝野町	古墳	円（18.4）　横	６Ｃ末～７Ｃ初（Ⅱ）	短頸壺１			22

【凡例】　円：円墳、方：方墳、後円：前方後円墳、（　）内の数値：円墳の最大径（m）
横：横穴式石室、縦横：竪穴系横口式石室、横穴：横穴墓、箱：箱形石棺・箱式石棺、木：木棺直葬
年代の欄の（　）内のローマ数字は三木2005における段階
記号の内容は判断しうるもののみ記載

【文献】　１：奥村（編）1983、２：加悦町教育委員会1983『入谷Ａ−１号墳』、３：勝部昭1980「十印のある土器」『古代学研究』第94号 古代学研究会、４：松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 1995 『筆ノ尾横穴群発掘調査報告書』、５：松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 1998 『袋尻遺跡群発掘調査報告書』、６：米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団1989『石州府古墳群発掘調査報告書』、７：（財）鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター2005『名和飛田遺跡』、８：八鹿町教育委員会1990『小山古墳群・東家の上古墳群』、９：兵庫県教育委員会1993『箱塚古墳群』、10：山本三郎・高島知恵子1987「第３章 下青野地域の調査 第１節 前ノ谷古墳（AS-111）」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（１）』兵庫県教育委員会、11：兵庫県教育委員会1987『墓山古墳』、12：大阪府教育委員会1991『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』、13：（財）大阪府埋蔵文化財協会1995『志紀遺跡』、14：柏原市教育委員会1985『大県・大県南遺跡』、15：柏原市教育委員会1988『大県遺跡』、16：柏原市教育委員会1992『平尾山古墳群平野・大県支群』、17：柏原市教育委員会1991『柏原市所在遺跡発掘調査概報』、18：柏原市教育委員会1984『柏原市所在遺跡発掘調査概報』、19：柏原市教育委員会1989『高井田遺跡』、20：柏原市教育委員会1991『高井田横穴Ⅲ』、21：新庄町教育委員会・奈良県橿原考古学研究所1988『寺口忍海古墳群』、22：古川登1995「顔料あるいは塗料による彩色記号のある須恵器について」『岐阜史学』第89号、23：三重県埋蔵文化財センター1994『小屋城古墳群』、24：（財）鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ』、25：東方仁史2011「鳥取県岩美町浦富５号墳出土資料について」『鳥取県立博物館研究報告』48、26：谷本進1985「漆記号を施した須恵器について」『但馬考古学』第２集、27：大手前大学史学研究所・香美町教育委員会2014『文堂古墳』、28：豊岡市教育委員会2012『市場神無遺跡群』、29：八日町教育委員会1992「西家の上古墳群」、30：藤原弘幸1987「穴ヶ谷西11号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和59年度、31：朝来市教育委員会埋蔵文化財センター「高田遺跡の調査」（https://www.city.asago.hyogo.jp/site/kyoiku/2890.html、最終閲覧日：2024年４月11日）

Ⅱ段階（６世紀末～７世紀前葉）

：古墳を中心に彩色記号が展開

湯舟坂２号墳の事例は、この枠の中で捉えるならばⅡ段階に該当する。Ⅱ段階の状況を詳しくみると、地理的に近い兵庫県北部（但馬）、鳥取県（因幡、伯耆）などの日本海沿岸地域では漆記号付須恵器が多く、赤色顔料記号付須恵器は畿内（大阪府や奈良県）を中心として畿外各地に点的に確認できる。古墳出土事例に焦点を当てると、彩色記号付須恵器は群集墳において全ての古墳でみられる訳ではないため、当時の葬送儀礼で広く用いられたものではないことが明らかである。また、Ⅱ段階の赤色顔料記号付須恵器は、馬具が出土した前ノ谷古墳や寺口忍海古墳群でも屈指の墳丘・石室規模を有するＨ支群 29 号墳など、いずれも階層の高い古墳から出土している。対照的に、漆記号付須恵器は石州府古墳群の古墳や東家の上３号墳など、墳丘と石室が小規模かつ副葬品の内容も貧弱で、階層的に上位とは思われない古墳からの出土も確認でき、分布が偏る傾向と合わせて在地的な習俗であった可能性も想定できる。

赤色顔料記号と漆記号の関係性には課題を残すが、共伴もないため[4]、両者は切り離して考えるのが妥当だろう（松永ほか 2014）。以上から、赤色顔料記号を須恵器に付す行為は近隣地域からではなく、畿内との何らかの関わりの中でもたらされたと想定しておきたい。

赤色顔料記号付須恵器と葬送儀礼　では赤色顔料記号を付す行為にはいかなる意味が想定できようか。これまで、鍛治工人が付けたとする見解（北野 1994）、祭祀や葬送儀礼との関連（古川 1995 ほか）などが示されているが、意見の一致はみていない。記号の内容に意味を読み取ろうとする試みもあるが、湯舟坂２号墳出土須恵器の赤色顔料記号は、形に意味を見出しうるようなものではなく、記号の内容からその意味を推し量ることは難しい。

そこで検討の視点を変え、８類須恵器にのみ赤色顔料記号がみられる点に注目する。先述の通り、左袖部出土須恵器は８・11 類が主だが、同じタイミングで石室内に入れられたもののため、両者の差異は生産地の違いに起因する可能性が高い。仮に湯舟坂２号墳において、赤色顔料を用いる葬送儀礼や、「黄泉戸喫」など死後の世界を意識した儀礼の中で赤色顔料記号を付す行為がなされたとすれば、８類須恵器にのみ赤色顔料記号が偏ることは不自然である。

一方、飲食儀礼など、被葬者と関係のある複数の生者が葬送儀礼に参加し、その中で特定の生産地から８類須恵器を調達した一部の儀礼参加者（個人か集団かは不明）[5]が何らかの理由のもと赤色顔料を付したと考えれば、特定の須恵器にのみ記号がみられる点も理解しやすい。赤色顔料記号を付す背景はなお明らかにしえず、推論を重ねたきらいがあるが、赤色顔料記号付須恵器の存在からは、異なる習俗を有する多様な人物たちが葬送儀礼に参加したと想定でき、ここに湯舟坂２号墳の特質がみてとれるのではないだろうか。このような理解が成り立ちうるのか、今後、他地域の彩色記号付須恵器の検討が不可欠である。

（３）羨道部の土器と被葬者像

２類の須恵器　羨道部右側と一部玄室中央部の右側壁付近から出土した、他と比べてサイズの大きい２類の杯身も興味深い（図６）。２類の杯身は、古手の様相を呈するが、サイズに注目すれば但馬の７世紀代の須恵器と似ている。但馬地域の須恵器を実見していないため、判断は留保したいが、これらについては、但馬地域からの搬入品か否か、今後の検討が待たれる。

暗文土師器　また、羨道部左側から出土した暗文土師器杯（図６右下、写真２右）も注目さ

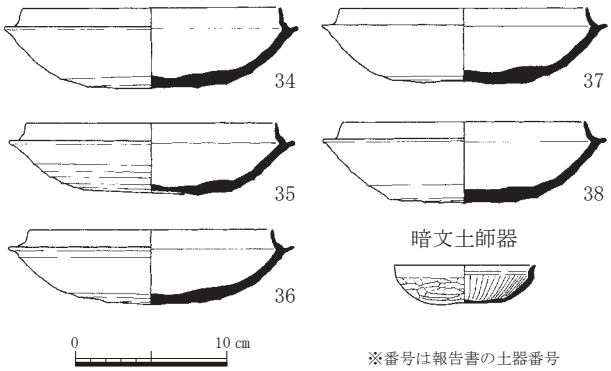


図６　２類の杯身と暗文土師器（S=1/5）（奥村編 1983）

写真２　湯舟坂２号墳出土の土師器（栗山雅夫撮影）

れる。当資料は、湯舟坂２号墳の他の土師器とは様相が大きく異なり、その色調や胎土の精良さは飛鳥地域の土師器と類似する。したがって、在地で畿内産土師器を模倣して製作されたものではなく、畿内で製作された搬入品の可能性が高い。さらに暗文土師器杯の器形に注目すると、口径に対して器高が低く、口径と器高の関係を示す径高指数（器高 / 口径× 100）は、約 26.6 である。また、土器の器表面については、「外面の調整は口縁部のみ横ナデ、それ以下をていねいにヘラケズリ」しており、「内面は、横ナデの後、放射状暗文を施」す（奥村編 1983:89 頁）。以上の器形や器表面調整の特徴は、近年の飛鳥・藤原地域の緻密な土師器研究（大澤 2019）を参照すれば、飛鳥Ⅱの中でも古手の様相と類似する。飛鳥Ⅱの年代は、おおよそ７世紀半ばとされており（西 1986、菱田 2011 ほか）、先に述べた須恵器の年代とも齟齬はない。

では、当資料についてはどのような評価ができようか。西日本出土の畿内産土師器を検討した林部均氏は、飛鳥Ⅱ以降、全国的に畿内産土師器の分布が一斉に拡がること、日本海沿岸地域も同様の傾向が見出せることを指摘した。その背景については非常に慎重な姿勢を示しつつも、「畿内にあった政権が律令国家とよばれる新しい支配体制の確立にむけて、最初に地域支配の再編成をおこなった時期とうまく対応」し、「畿内と西日本との交流の活発化の背後に、このようなことを考えてもあながち無理なことではないであろう」とした（林部 1992:104 頁）。暗文土師器の集成資料（金田編 2005）以降の事例を検討できていないため、断言はしえないが、丹後地域、あるいは日本海沿岸地域においても最古級段階の畿内産暗文土師器杯であることは間違いなく、当地域と畿内との交流を物語る遺物と評価できる。つまり、湯舟坂２号墳の最終埋葬、あるいはそれに近い段階に葬られた被葬者も、畿内とのつながりを持ち続けていたことが土器からみえるのである。

５．おわりに

以上、湯舟坂２号墳出土土器を対象として多岐に渡る論点を検討してきた。最後に本論の内容をまとめる。まず、出土土器は３段階に分けられ、土器からみた被葬者数は、奥壁部が２人以上、左袖部が１人、羨道部が１人以上となり、合計４人以上と推定できる。

次に湯舟坂２号墳の被葬者像については、初葬から最終埋葬段階の被葬者まで、畿内など他地域との関わりを想定できることを指摘した。報告書では、被葬者が軍事的に最高位にあった

ことや、丹後地域への仏教文化導入に先駆的な役割を果たしたことなどが指摘された（奥村編 1983）が、新たな被葬者像を考える切り口を提示できたと考える。

論じ残した課題も少なくないが、本論での検討が湯舟坂２号墳の被葬者集団の実像を評価する一助となれば幸いである。

謝辞

本稿は、京都府立大学 ACTR 湯舟坂２号墳プロジェクト第３回成果報告会での報告に加筆と修正を加えたものである。また、以下の方々から種々のご教授を賜りました。記してお礼申し上げます。

諫早直人　新谷勝行　菱田哲郎　廣瀬覚　溝口泰久　守田悠　松尾史子　森島康雄　京丹後市教育委員会　京都府立大学学生諸氏　兵庫県立考古博物館　京都府立丹後郷土資料館（敬称略・五十音順）

註

（１）本論における出土土器と副葬段階の検討については、菱田哲郎氏と溝口泰久氏からのご教授や菱田氏の論文（菱田 2021）を参考にしたところが大きい。記して感謝申し上げる。

（２）報告では、７類の椀と蓋の存在から、「想像を逞しくすれば、日本海沿岸地域を中心とした何らかの交流（人、モノ、情報など）があり、湯舟坂２号墳の初期の被葬者もこれに関わったのかもしれない。」とした（稲本 2023）。報告後、淡路汁谷窯（兵庫県教育委員会 2006）など瀬戸内地域の類例と菱田氏の研究（菱田 2023）を知り、見解に修正が必要と思われたため、本論にて訂正する。

（３）本論では、記号を付すにあたり、赤色顔料を用いた事例を「赤色顔料記号」、漆を用いた事例を「漆記号」、両者をまとめて「彩色記号」（古川 1995、三木 2005 ほか）と呼ぶ。なお、先行研究の「朱記号」、「朱書記号」（北野 1994、谷本 1995 ほか）と本論の「赤色顔料記号」は同義である。

（４）なお、両者が遺跡内で合わせて確認されたのは石州府古墳群４号墳のみである。ただし、赤色顔料記号付須恵器（６世紀末）は墳丘盛土内から、漆記号付須恵器（６世紀末と７世紀中葉）は墳丘上や墳丘裾から出土しており、これらが同時期に用いられたとみる積極的な根拠とはなりえない。

（５）後期古墳では葬送用に直接生産地から持ち込まれた須恵器が確認されている（石井 2007、溝口 2023）。

参考文献

石井智大 2007「古墳への須恵器の供給とその背景」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究室

稲本悠一 2023「出土土器からみた湯舟坂２号墳」『地域資源としての湯舟坂２号墳Ⅲ―湯舟坂２号墳の被葬者像を探る―』京都府立大学文学部考古学研究室

奥村清一郎（編）1983『湯舟坂２号墳』久美浜町教育委員会

大澤正吾 2019「飛鳥時代における土師器杯Ｃ・杯Ａの変遷とその区分」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会

金田明大（編）2005『畿内産暗文土師器関連資料Ⅰ―西日本編―』奈良文化財研究所

北野重 1994「朱記号を持つ須恵器」『韓式系土器研究Ⅴ』韓式系土器研究会

小林行雄 1976「黄泉戸喫」『古墳文化論考』平凡社（初出 1949 年）

近藤義郎 2001『前方後円墳に学ぶ』山川出版社

白石太一郎 1975「ことどわたし考―横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって―」『橿原考古学研究所論集』（創立

三十五周年記念）　吉川弘文館
白澤崇 1998a「組成から見た古墳主体部の副葬土器―静岡県・三重県の事例を中心に―」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上
白澤崇 1998b「組成から見た古墳主体部の副葬土器―２―」『静岡県考古学研究』No.30　静岡県考古学会
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
谷本進 1995「朱書記号と漆書記号の展開」『但馬考古学』第９集　但馬考古学研究会
寺前直人 2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
寺前直人 2006「ヨモツヘグイ再考―古墳における飲食と調理の表象としての土器―」『待兼山論叢』第 40 号　大阪大学大学院文学研究科
寺前直人 2022「土器祭祀―横穴式石室にみられる二相の土器使用儀礼―」『季刊考古学』160　雄山閣
中村彰伸 2018「丹後における横穴墓の立地とその階層性」『舞鶴・京丹後地域の文化遺産』（京都府立大学文化遺産叢書 14）　京都府立大学文学部歴史学科
西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
土生田純之 1998『黄泉国の成立』学生社
林部均 1992「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』第 39 巻第３号　考古学研究会
菱田哲郎 2011「３ 古墳時代の実年代 ②後期・終末期の実年代」『古墳時代の時代』１（古墳時代の枠組み）　同成社
菱田哲郎 2021「うつわの大変革―湯舟坂２号墳出土の土器が示すこと―」『地域資源としての湯舟坂２号墳』京都府立大学文学部考古学研究室
菱田哲郎 2023「須恵器もどきの土師器―湯舟坂２号墳からみた器の革新―」『地域資源としての湯舟坂２号墳Ⅲ―湯舟坂２号墳の被葬者像を探る―』京都府立大学文学部考古学研究室
兵庫県教育委員会 2006『汁谷窯跡群・汁谷遺跡』
藤野一之 2019『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房
古川登 1995「顔料あるいは塗料による彩色記号のある須恵器について」『岐阜史学』第 89 号　岐阜史学会
松永悦枝 2014「文堂古墳出土須恵器の年代と性格」『文堂古墳』大手前大学史学研究所・香美町教育委員会
松永悦枝・西村秀子 2014「文堂古墳出土須恵器からみた漆記号付須恵器の特質」『文堂古墳』　大手前大学史学研究所・香美町教育委員会
三木雅子 2005「名和飛田遺跡出土の彩色記号をもつ須恵器について」『名和飛田遺跡』(財)鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所
溝口泰久 2023「重量からみた湯舟坂２号墳の須恵器生産」『地域資源としての湯舟坂２号墳Ⅲ―湯舟坂２号墳の被葬者像を探る―』京都府立大学文学部考古学研究室
三原彰悟 2021「器種構成からみた須恵器副葬の展開―円山川流域を中心に―」『立命館文學』第 674 号　立命館大学人文学会
森岡秀人 1983「追葬と棺体配置―後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二、三の考察―」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念　考古学論叢』関西大学
森島康雄 2022「企画展「湯舟坂２号墳細見」から」『丹後郷土資料館調査だより』第 11 号　京都府立丹後郷土資料館

編集後記

2020 年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも 6 年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが 2018 年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3 回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわかないが、1994 年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。（い）

表紙写真

上左　双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）

上中　第 2 回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）

上右　「つなプロ」風景（諫早直人撮影）

下　湯舟坂 2 号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）

裏表紙写真　湯舟坂 2 号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第 33 集

地域資源としての湯舟坂 2 号墳

編　集　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
https://kpu-his.jp/
発 行 日　2025 年 3 月 6 日
印　　刷　北斗プリント
〒 606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2